

松永大五郎は名前に似合わず、アメリカの血をひいていた。だから顔は日本人離れをしており、新宿や浅草を歩けば忽ち外国人から英語で喋りかけられる。おそらく同志として、目的地までの道のりを大五郎に訊ねているようだが、英語が苦手な大五郎は「ワカラナイネ」と謎のカタコトを返して逃げて行く。

大五郎は18歳である。大五郎を知る者以外、誰が彼を日本人の学生だと思っただろうか。

2メートル近い長身の大五郎が大学構内を歩けばひととき目立った。しかしサークルの勧誘は一向受けない。おそらく外国人講師と勘違いされているのだろう。

趣味の読書とオセロで猫背になった大五郎の体に、若々しい筋肉はない。元々色素の薄い肌は、室内で済む趣味によって余計に青白くなり不健康に見えた。

そんな大五郎を同級生は「ミスター・フ

アイブ」と呼んだ。大五郎の「五」からフアイブと名付けたそのあだ名を、大五郎は大変気に入った。この陰影のはつきりした顔立ちに相応しい名は、水を得た魚のように大五郎を生きやすくし、自信を与えた。

風呂に浸かれれば

「ミスター・フアイブ、ミスター・フアイブ……」

トイレで用をたす時も

「ミスター・フアイブ、ミスター・フアイブ……」

と独りごちた。

ある日、新宿駅で友人と待ち合わせていた大五郎は、外国人旅行者に声をかけられた。

未知の言語で話しかけられることに恐怖でしかない大五郎は、咄嗟に片手で制すと

「ノー、ソーリー。ソーリー」

と言いつつ、会釈をした。外国人は大げさに残念そうな表情をすると「Okay」と呟き、去って行く。

大五郎は慄いた。つたない英語ではあるが、正面切って対応した自分自身に驚いたのだ。

するとしきりに独りごちていた、あの「ミスター・ファイブ」が頭の中で蘇った。それは教会の鐘の音のように鳴り響き、祝福を受けているような心持ちさえた。

大五郎は空を仰いだ。晴天である。清々しく青い。神の姿は見えないが、改めて自己紹介したい気分である。無宗教であるが、見よう見まねで十字をきった。

「行こうぜ、ミスター・ファイブ」

向かい側から友人がやって来る。並んで歩くミスター・ファイブは、いつもより心なしか胸を張って歩いた。